

【表1】戸城城興亡史年表

年号	西暦	事	項
暦応 2 延元 4	1339	菊地武重、武俊の子供豊前討入り、勾金荘戸城に城を築く、大尊寺城(田川市伊加利)を築いて、嫡子太郎武光に守らせる。[O][●][●][●]	
貞和 5 正平 4	1349頃	足利尊氏、宇都宮冬綱を豊前守護とする。[O] 戸城城は菊地武重太宰府警備のため増固し、麻生玄蕃頼、菊地武光らける。[O]→[●]は正平26年(1371)武重肥後に播磨病死。	
応安 3 建徳 3	1370	足利氏、畠山道賢の弟式部少輔義隆を豊前守にして戸城城に下向、子義豊、孫義孝を在城。[O][●]	
文中 3	1374	この頃、南朝方であった宇都宮氏度々戸城城攻撃 [O] 大内義弘、豊前守護になる。応永6年応永の乱で散死。	
応永 6	1399	畠山義隆、大内盛見に降る。[O]	
" 10	1403	大内盛見、西防・長門・豊前守護になる。	
" 30	1423	大内盛見、戸城城攻め、畠山義隆、子義孝自害滅亡、盛見の嫡男内田右馬頭隆春に守らせる。[O]	
正長 元	1428	肥後の菊地武志、豊前を侵す。馬ヶ谷(京都府)新田義高、これと戦い中津川で戦死[O]→「豊前人物誌」では永享3年(1431)とある。	
永享 3	1431	菊地民部大輔武宗、戸城城を攻略して、桃井兵部少輔直之在城。[O]→[●]	
" 4	1432	[O]→[●]では、菊地武志、桃井直之とある。再び大内配下の城となり、陶兵衛守弘純の嫡子堀五郎弘守在城。[O]→[●]は、陶越前守弘純の長男武隆。	
文明 元	1469	大内政弘の代官村として、杉原流守弘定の子杉民部大輔弘基をとどめ、内田三カ村を領す。[O]→[●]は杉弘長。	
天文 20	1551	大内義隆、陶隆房に攻められ自殺。大内氏滅ぶ、宇都宮左馬介正房より攻略され、杉形少輔長政自奔。	
" 21	1552	西郷入道忠興その子刑部丞貞正在城。[O]→[●]では天文22年。	
弘治年中	1555頃	毛利元就攻め、陶新五左衛門尉元祐を襲く。その後は小早川秀忠の弟越後介義平在城。[O][●]	
天正 7	1579	義平病没後、高屋左馬介元有在城。[O][●]	
天正 15	1587	豊臣秀吉九州征伐のとき、元有降参するが許されず、黒田如水に滅ぼされる。その後、城主なし。[O]	

[O]は「豊前国古志郡」と、[●]は三松庄「福岡県戸塚市」以上は有吉憲実編「福岡県郷土資料」所収、[O][●]は「豊前古志郡」と、これは「郷土田川21号」所収、瓜生統一「田川郷土年表」から。 [O][●]は「田川郡誌」、田川市立図書館蔵。



神輿にかわる御幣が太祖神社を出發するところ

田川郡赤村大内田の岩戸神楽

香月靖晴

幣を下げて、神輿がわりにしている。それを区長が持って、お旅所にあてられている神社下の公民館までくだる。

夜八時から、大内田神楽講の「よいち神楽」が始まる。公民館には、会場いっぱいになり、が集り、零時近くまでにぎわう。

二九日は、おのほりである。今は、午後四時頃から祭典を行って出発し、神社で祭典があった頃、午後一時から三時過ぎまで「お立ちの神楽」が行われていた。神楽が終ると、神輿は当番の地区をまわると、組内に入ると、各戸で神輿が台の上に置かれ、神楽「四方鬼」が演じられた。これを繰返すので、神輿が神社に帰着するのは、夜八時頃であった。

1、大内田の概略

大内田は、田川郡赤村北部の集落で、北の大坂山(五七三m)から南東の戸城山(三二一八m)に囲まれた、山あいの農村地帯である。

行政区は、東に京都郡犀川町、北は田川郡香春町に接する。大内田の現在の集落は、門前、中村、山ノ内、大坂の四隣組で、七八戸ほどである。北西部の小柳という三〇戸ほどの所も組内であったが、数年前に区分した。

歴史をたどると、赤村は「日本書紀」安閑天皇二年(五三五)に「豊国・我鹿屯倉」と出ていた。大内田と我鹿屯倉の関係はわからないが、後、勾(今)香春町に在り、江戸時代は、小倉藩伊田手永の大内田村であった。明治一八、九年の町村合併で、西の小内田村と合して内田村となり、明治二二(一八八九)に赤村と合併して現在に至っている。

大内田の歴史は、戸城山の攻防をのべてはいない。初は、遠白山といったが、戸代山から戸城山と表現が変わった。戸城山に最初、城を築いたのは、肥後の菊地武重である。「田川郡誌」に、建武二年(一一三五)足利尊氏は陣子ヶ嶽城(香春町)を築き、一族の足利純氏に守らせたといい、田川地方も、南北朝の騒乱からまぬがれることはできなかった。以後の興亡は「戸城城興亡史年表」にまとめるが、豊臣秀吉の九州征伐まで続く。

2、太祖神社の神幸祭

太祖神社は、字氏神(中村)にある。祭神は、天御中主命、伊弉那岐命、伊弉那美命、保食命、大山祇命、罔象女命、水分命、猿田彦命である。創建は推古天皇二年(五九四)で、戸城山頂に奉祀したという。暦応二年(一一三三)菊地武重が築城の時、同山の北宿の谷に移し、長禄二年(一一四八)小内田と山浦ともに、現在地に分配されたという。

大内田太祖神社の神幸祭は、現在毎年四月二八日、二九日の両日に行われる。神輿の御神幸も、隣組当番で行われ、当番地区へもまわっていたが、五、六年前の中村を最後に絶えている。祭りの世話は、区長・隣組長と神社総代によってなされ、神社総代の長を宮柱と呼んでいる。

祭りの日程は、二八日午後四時頃から、世話役一同、神社拝殿に集って祭典が行われる。供物は、酒、御飯を円すい形にしておき(木製楯)に入れたおこく、たけのこ、果物等である。参列者は、米一升を持ち寄る。神社総代は、毎年順番で自家製の饅餅を二段二重をお供えする。また、宮柱は神職の衣装で、境内の祇園社にも、酒とおこくを供えらるうそくをとす。祭典が終ると直会になり、酒をまわすと同時に、参列者全員、おこくを少しずつたべる。五時過ぎ、御神幸が発する。御神幸といっても、現在は、一・五メートル位の竹の先に御

3、大内田の岩戸神楽

大内田の岩戸神楽は、明暦元年(一六五五)に始まるという。当時、この村に牛馬の疫病がはやり、人びとも及んだので、村人は太祖神社の神にうかがいをたて、みくじを引いたところ、神楽を行えの神意が出た。それで、四月の神幸祭に万年前として行われていた。明治年間まで、築上郡築城町赤穂神楽を主として呼んでいたといわれる。現在の神楽は、今から七〇年前程、赤穂から神太郎右衛門という神職を招いて、泊りこみで指導をうけ一二人の神楽講が始まった。五年ほど前、神楽講の一人たちが赤穂に見学に行ったところ、舞い方は少し違いますが、大筋はかわらない、赤穂が上手で流暢であるのに対し、大内田は、荒けずりの印象を受けたという。

今の神楽講は二、三年前から青年七、八人に加えて、一二人ほどで継承している。現在行われている曲目は、「表2」で示しているが、「お立ちの神楽」は、五月五日、上赤の光明八幡宮神幸祭に恒例として奉納されている。神楽の所作の基本型は、拝礼、舞切(左右三べん)、かけ出し、折柳、うち込(左右三べん)、舞切、拝礼である。足はすって舞え、所作は、上は大きく下は小さい、逆三角形に舞えと教えられている。

三本か五本の剣を持って、宙返りする「三本剣」「五本剣」の曲目があったが、今は行われて

〔表2〕 神楽の順序 (○印は、昭和54年に演ぜられたもの)

曲目	四方舞	折居	御福	花神楽	地割り	幣切り	前み	舞み	上み	綱み	綱み	綱み	盆	岩戸
お着きの神楽 (夜いち神楽)	○	○	○		○	○	○	○	○				○	○
お立ちの神楽 (上赤で行われた)	○			○						○	○	○	○	○

「湯立神楽」もあるが、特別な大祭などの時だけしか行われない。大きな生木で三脚を作り、大釜を乗せ水を入れて、三三把の薪でたぎらす。一方、杉の木を頂上部分だけ葉を残し、綱を張って立てる。杉の葉の下には、五色の御幣をさし、餅を入れたわら包みを下げる。演技は、舞上御神先の時に行われ、鬼と神主が杉の柱に三回登る。二回目に、鬼が柱の上から餅をまき、神主は御幣を投げる。大釜の方は、火が燃えつきた頃、鬼・神主・鬼の順で、大釜の下にかけ込み火がついた灰を底からけって行く。その時、火の粉が勢よく周囲に散るが、やけどはしない。演技者は、白足袋をはいているが、水の上を通るな、足袋をぬらしたら、やけどのもの

とだ、と教えられている。

神楽の音楽は、太鼓・笛・鉦それぞれ一人である。以下、神楽の各曲目の概略を述べる。

① 四方の舞(撒米)

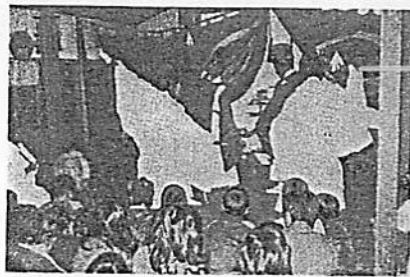
米をのせた三方を正面に置き、赤の狩衣の人が一人で舞う。拝礼後、左手で右袖先をつまんでまわり、袖をひるがえして舞う。その後、三方の米を右手にとり、左手でおさえてさがり、舞台をめぐって南(以下、神輿にむかって右をいう)にまく。それを、西・北・正面に繰返す。所要時間、約五分である。

② 折居

赤と青の狩衣の二人ずつ、四人で舞う。左手に扇、右手に小幣(二〇センチほどの御幣)を持って出て、前列に赤狩衣、後列に青狩衣で拝礼する。まず、前列右の人が、腕を左二回、右一回後に振り、口上を唱えながら舞う。終わると、四半分右に動き、左にいた人が前列右端に来て同じ舞を繰返す。四人が終わると、中央に集って舞う。続いて、青衣二人はすわり、赤衣二人が舞い、また入れかわって舞う。終わると、四人前後左右交錯しながら、輪になって舞う。最後に、青衣前列、赤衣後列で拝礼する。約五分である。

③ 御福

折居と同じ衣装、採物(手に持つもの)、人数である。四人輪になって舞い、採物を頭のところまであげ、歌いながら静かに右にまわる。次に、南に列になり、小幣を扇に扇を顔の前にして歌い、そのまますわって扇をまわす。終



折居

ると、中央に集って御福の歌をうたう。続いて、青衣二人はすわり、赤衣二人が舞い、また入れかわって舞う。次に、四人立って右にまわりながら、各人四隅で舞う。最後に青衣前列、赤衣後列の拝礼で終る。約五分である。

④ 花神楽

折居と同じ衣装、採物で、まず、四人円陣をつくって右に廻りながら舞う。終わると、南をむいて横一列に並び、小幣を右肩に、左手の扇を顔の前に持ってきて歌う。続いて、そのまますわって扇をまわす。次に、中央に集り、円陣をつくってまわる。これを、西・北・正面と繰り返す。それがすむと、一人一人米をのせた三方に置いて、五色の細紙片を包みこんだ紙包みをとる。紙包みを持つと、四人並んで東西

南北それぞれで、五色の紙片をまく。最後に、中央でまいて終る。約一分五分である。

⑤ 地割り(剣の舞)

まず、木神がしやくまをかぶり、千早(袖なし羽織型)、タツケの衣装で出て、刀を激しく振る。思い切り飛びあがって刀を振る所作もある。四分ほど演じると、南東隅にすわる。次に、火神が入場して同じ所作を行い、さらに木神と刀を振って斬りあい、南西隅に坐る。三人目は金神、四人目は水神が出て、前者と同じ所作を行う。五人目に土神が入場する。衣装は、前の四人と少し違って、白の褌をかけ、やや短い刀を持っている。まず、木神に口上をかける。木神がそれに答え終ると、飛びあがりながら激しく斬りあう。同じことを、火神・金神・水神も繰り返す。やがて、式部と呼ばれる神主姿の人が、左手に御幣と右手に二〇センチほどの御幣(三段幣という)を五本持って出場し、静まれ、と叫ぶ。式部が、木神から順に口上をかける時、五人の神々はそれぞれ返答する。終ると、五人とも立って、右にまわって再び坐る。続いて、式部は三段幣を木神から順に与える。三段幣は、木神が緑、火神が赤、金神が銀、水神が黒、土神が黄である。土神が三段幣を受けると、それを右手、扇を左手に持って舞う。その間、他の四人は、三段幣を観衆に投げ与えて退場する。舞い終ると、土神と式部は退場するが、この時も、三段幣を観衆に投げ与える。約三〇分である。

地割りの演技は、曆をあらわすもので、春が

木神、夏が火神、秋が金神、冬が水神である。土神は自分の季節がないので、入る時期を要求して、他神と斬りあうのである。仲裁するのが式部で、春夏秋冬が始まる前それぞれ一八日間を土神に与えた。これが土用である。

⑥ 幣切り

神主衣装の人が、左手に御幣右手に小幣を持って出て、激しい動きで舞う。三分ほどして、しやくまに鬼の面、狩衣、タツケに白褌の人が、左手に扇、右手にしかん杖(メートルほどの竹の両端を白紙のふでで飾る)を持って出る。鬼が進むと、神主は南隅にさがって小幣を鬼をまねく。鬼が中央に進むと神主は退場し、鬼が残って舞う。その動きは、激しく力強い。しかん杖で床をたたき、反問を踏む。約七分である。

⑦ 前御神先

幣切りの鬼が下ると、入れかわりに神主が入場し、御幣と小幣を持って舞う。二分ほどして、鬼がしかん杖を持って出て、神主とはげしく組み合う。鬼の所作は変化にとんでいて、太鼓の上に乗ってあたりをにらんだり、観衆の中に割って入り、子供を抱きかかえて舞台で舞う。また、水を入れたバケツとヒシヤックを持って神主を追いまわし、観衆にも水をかける。鬼の所作は激しく、しかん杖で床を強くたたき、竹が割れる。神主と鬼の闘いは決着がつかず、両者はさがる。約一分五分である。

⑧ 舞上御神先

まず、神主が出て舞い、鬼が出る。衣装・採物は前と同じである。所作も、前と同じで力強



舞上御神楽、鬼が観衆の中に入って子供をだきあげたところ

⑨ 綱御神先前段
三方に、米と紅白の綱をのせて正面に置き、シヤゲマをかぶり千早を着た二人が、腕を組んでケンケンで廻る。終わると、二人は退場するが、やがて神主と入場し、神主が舞う。続いて、しかん杖を持った鬼があたりをにらみながら登場する。舞台では、千早姿の二人が綱の両端を



綱御神先後段、鬼がしばられたところ
上赤の光明八幡宮神幸祭にて

⑩ 盆神楽
赤狩衣の一人、扇と小幣を持って入場する。

持ち、その内側に神主がいて、鬼と闘う。神主が鬼を綱でしるすが、鬼はそれを突きはなすなど迫真の演技もある。最後に、鬼をしばった格好で退場する。約二五分である。

⑪ 綱御神先後段

前段で綱を持った二人と神主が入場し、続いて、鬼があたりをにらみながら出る。前段と同じように、舞台いっぱいまで闘う。その間、鬼は子供を舞台に抱きかかえてきてみえをきつたり、綱を奪ったり、また疲れてすわりこみ、肩で息をするしぐさもある。最後に鬼をしばるが、解いて、綱持ちの二人は退場し、神主と鬼が問答する。舞上御神先の結末と同じ筋書で、鬼が舞って終る。約二五分である。

拝礼のあと、両手にお盆一枚ずつ、底を指先で支えて舞う。やがて、三方に供えている米をお盆に入れ、両手で底を支えてこぼさないように舞う。跳躍の所作も入り、その妙技に、観衆から拍手があがる。約一〇分である。

⑫ 岩戸の舞

最初、老神の面をかぶり、扇と御幣を持った人が、腰をまげてよたよたした足どりで出場する。思兼命である。一メートルほどの木箱の天岩戸の前で拝礼し、立ちあがると、不安定な足どりで舞い、終ると岩戸の横に坐る。二番目に、面をつけた青の狩衣の人が出て舞い、終ると、思兼命の左に坐る。太玉命である。三番目は、しやぐまをかぶり面をつけ、千早を著た人が、左手に御幣右手に矢の羽のついた部分を持って舞い、太玉命の横に坐る。金富命である。四番目は、天細女命である。環瑠をかぶり、女面をつけ、女装で舞う。その所作は、尻をふったり、女性の特徴を示す。舞い終ると、金富命の横に坐る。最後に、しやぐまをかぶり黒い面をつけ、濃茶色の狩衣の主力男命が出る。拝礼の後、跳躍も入れて舞う。その後、何度かの試みの末、やっと岩戸の扉をあける。岩戸の内部は、鏡を御神体としてろうそくをともしている。思兼命が拝礼の後、御神体を持ちあげて、よたよたと進む。他の神々は、出場した順で続く。その御神体を宮柱が受取り、安置して拝礼する。所要時間、約三〇分、これで神楽は終る。

4、大内田の祭り

大内田の全体的な祭りは、三月の戸城神事と春祭、四月の神幸祭、田植あがりの皆作もあり、九月のおくんち、一二月のジンガの祭りである。

戸城神事は、毎年三月一日に行われ、大内田の老人が、戸城山に登っておこもりをする行事である。戸城山頂には、石祠があり、今でも、附近を掘ると焼米が出るという。

皆作こもりは、太祖神社に集っておこもりをする行事である。各戸一人以上、弁当を持ち寄って会食する。

ジンガの祭りは、大内田の自家筋三戸の人たちで行われる。神社で祭典の後、当番の家に移り、夜あかして飲食する。この祭りは、ジンガ以外の人は座敷に入れないなど、昔から厳しい規約がある。

春祭りやおくんちは、かつての、親戚・知人と呼んで、会食・歓談するにぎやかさはなくなっている。今は、神社総代など世話役によって祭典が行われるだけである。

大内田も過疎の波に洗われている地区である。その中で、伝承が軽しい神楽が力強く演じられているのは、土地の人びとの熱意の現われである。大内田の神楽は、迫力に満ちている。

(嘉飯山郷土研究会会員)

江戸時代の妻敵討

——妻敵討史料紹介と妻敵討の手続——

萩尾明彦

一、江戸時代に編纂された福岡地方に関する地誌書『筑前国続風土記附録』を讀んでいると、次に示す記事に出会った。

「安永九年、豊前中津奥平氏の家士荒井三十郎、同僚渡辺金十郎と吾者の妻を奪ひ、出奔し、此駅（筑前国御笠郡山家宿）筆者註）にかくれ居しを、同年三月十八日、金十郎さがし求て二人ともに討果しぬ。其屍を大日嶺にうづみ、塚を築けるとなり。三十郎僧義を失ひ、女もまた貞節の道に背きしかば、かかる天譴を蒙れるはことほりなり。」(句読点は筆者)

これは、山家宿（現福岡県筑紫野市）で起ったいわゆる妻敵討の記事である。近世江戸期の妻敵討は、交通して出奔した姦夫と姦婦を夫（本夫）が見つけ出して、姦夫、姦婦の両者を討取る事を指していた。

二、さて、「筑紫妻敵由來」という史料がある。これは、前に紹介した安永九年山家宿妻敵討の記録である。先ずはこの史料にもつき、山家宿妻敵討事件の内容を紹介することにしよう。

筑紫妻敵由來

豊前國中津藩奥平正継の家中渡辺金十郎（三十三歳、陸士目附役）は、安永八年五月より江戸に詰めていた。中津の金十郎の家に、実母、女房梅野、六歳になる娘がいる。金十郎の妻梅野は、見目形よく、歌道にも秀いで、文章にも熟達して、家中でも評判の

女性であった。その留守宅に、金十郎の甥で荒井郷四郎の養子になっている荒井三十郎がしばしば出入りしている。その三十郎は梅野に心を奪われ、梅野に自分の恋慕う気持ちを打ち明けようと心酔したが、なかなかその機会がない。たまたま穉の事があって、三十郎は金十郎宅に泊ることになる。三十郎は雨降りの徒然をしのぐために、薄雪物語等の本を出して、たわむれ過ぎた。三十郎は自分の気持ちを梅野に語れば、梅野も岩や木ではない、三十郎に心を動かした。それ以来、三十郎は恋慕の情がつのるばかりで、一層しげく金十郎宅へ足を運ぶようになる。家中での噂、評判も大変なものになる。そこで、一族が集まり、三十郎、梅野に内密に意見をしたが、二人とも一族の意見を聞き入れようとしない。一族は仕方なく、二人をそのままにしておいた。

さて、八月になり、渡辺金十郎は江戸詰を終え、中津に帰って来た。金十郎が外出して帰ってきて、梅野の枕元に三十郎の品を拾うこともあったが、梅野と三十郎の仲には気づかず、金十郎は喜びといた。しかし、二人の事について家中の噂があまりにも激しいので、妻を呼び、涙ながらに諫めた。

「私は三十二歳になる今まで、後ろ指を人にさされるような事はなかった。が、金十郎は浮気者の妻を持ち、自分も妻同様だらしない人間になっている。だから、相手が甥であるという事で見逃しているのだ、ともしば

新幹線で博多に降りたら 西に東に南へ北へー

西鉄特急バス

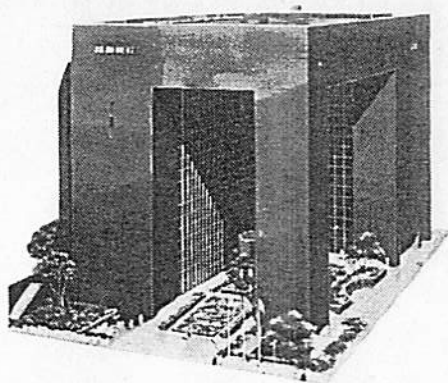
スピードアップでひとつ走り……。疲れ知らずの長距離特急バスです。



※お問合せは 西鉄テレフォンセンター ☎(092) 751 6231



地域社会の発展と躍進に奉仕。



新本店：地上11階・地下4階



お気軽にご利用ください。

(東京から鹿児島まで約150カ店)

財団法人 西日本文化協会

会長	九州電力社長	永倉 三郎
理事長	日本学士院会員	千沼 龍祥
専務理事	国連福岡専務理事	村上 義一
理事	西部瓦斯社長	塩屋 義之
	福岡銀行頭取	山下 敏明
	西日本相互銀行社長	岡村 武彦
	岡部機械工業会長	大村 繁
	西日本鉄道副社長	木本 元敏
	九州工業大学学長	浅原 照三
	福岡相互銀行社長	四島 司
	元福岡県知事	杉本 勝次
	徳水社長	徳島喜太郎
	出資経済連合会副会長	浜 正雄
	八幡製鐵所副所長	木村 修一
	正金相互銀行専務	山本敬一郎
	福岡教育大学学長	大賀 一夫
	九州電気工事社長	安元 司
	九州電力取締役専務	渡邊 哲也
	西日本文化協会事務局長	近藤 克巳
監事	電気ビル社長	今村 寛
	九州電力会長	瓦林 深
	福岡県知事	亀井 光
	福岡市長	進藤 一馬
	北九州市長	谷 伍平
	九州大学学長	神田 慶也
	北九州コカ・コーラ	篠原常次郎
	・ポトリング相談役	
	新日本製鐵常務顧問	
	北九州商工会議所会頭	
	西部瓦斯会長	
	西日本鉄道社長	
	九州電気工事会長	
		永野 弘次
		吉本 宮市
		山崎 寛
		安川 寛
		水野 勲
		野野 勲
		山崎 寛
		宮市 寛
		永野 弘次
		吉本 宮市
		山崎 寛
		安川 寛
		水野 勲
		野野 勲
		山崎 寛
		宮市 寛
		永野 弘次

趣 旨

当協会は、昭和三十四年秋に西日本教育芸術協会として発足、主として古典芸能を通じて学校教育に尽力し、昭和三十六年春に財団法人西日本文化協会として新発足した文化団体であります。

文化の進展に伴い、従来の古典芸能のみに止らず、更に意義ある行事を企画し、学校教育の期待に副うと共に一般社会の要望にも応えたいと念願いたしました。

何卒、この趣旨にご賛同下さいましてご協力ご支援を仰ぎ、当協会の目的達成のために特別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

事業の概要

- 1 芸能鑑賞
 - イ 古典芸能 能をはじめとし、狂言、文楽、歌舞伎等の古典芸能をとりあげ、とくに無形文化財に指定されたすぐれたものを紹介し、日本古来の伝統芸能の理解、鑑賞につとめる。
 - ロ 一般芸能 新劇、音楽、映画等の一般芸能をとりあげ、その要望に応える。
 - 2 文化財の公開
 - イ 文化財の現地見学 専門家、学者による文化財の現地見学、講演会を行ない、高い見識を培う。
 - ロ 美術展 絵画、彫刻、工芸、その他の文化展を開催する。
 - 3 研究会、講演会
 - イ 学習研究会 講演会 政治、経済、文学、教育等の学術的研究会 講演会を聞き、とくに科学的研究態度の根本として文化の健全な発展に寄与する。
 - ロ 教育研究会 講演会 茶道、華道等の文化活動を行ない、日常生活に於ける文化面の開拓を行う。
- ハ 出版 会誌「西日本文化」の発行、国内外の文献の紹介、復刻、書籍、雑誌のとりつき等を行ない、文化活動の原動力を培う。
- その他目的達成に必要なと思われる事業を行なう。

新加入者(敬称略)

(一般会員)

萩 尾 明彦
梶 山 茂
加 島 満智子
尾 山 明彦

編集委員(五十音順)
神戸大学教授 筑紫ヶ丘高校教諭 詩人
日本大学助教授 北九州大学助教授 九州大学教授 多久市立図書館司書 九州大学助教授 郷土史家

米松 細 秀 錦 田 志 佐 今
津 下 川 村 織 中 摩 津
三 志 選 亮 直 海 哲 健
郎 朗 章 三 介 樹 夫 哉 治

西日本文化 通巻157号
定価 300円 千29円
振替福岡 15918
昭和54年12月2日発行
発行人 千沼 龍祥
発行所
財団法人 西日本文化協会
〒810 福岡市中央区
薬院4丁目13番51号
九州電気科学館4階
電話 ☎4538 ☎4539
印刷 正光印刷株式会社